論　文 ニダバ (*Nidaba*) 40(2011), 92-101

ドイツ語授業における政治的カリカチュア

植　田　康　成

1. はじめに

本論文の目標は、外国語（ドイツ語）学習教材としての政治的カリカチュアの意義（可能性）と限界（取り扱いにおける困難）に関する考察を行うことにある[1]。

政治的カリカチュア（絵によるウィット）を素材としてのイディオム表現に関する授業展開の可能性については、他の箇所で述べた（植田 2001 参照）。ランデスクンデ（ドイツ事情学）展開についても、すでに他の箇所で論述した（植田 2007 参照）。さらに政治的カリカチュアは、異文化学習素材としてきわめて有用である。しかしながら、政治的カリカチュアは、定義上、現実の政治状況と密接しているが故に、時として文化間摩擦を誘発することもまれではない。とりわけ、ドイツ語圏以外においてドイツ語教育に携わっている者にとって、政治的カリカチュアが描かれた時事的背景および文化的背景に関する十全な知識を得ることは、少なくない困難を伴っている点を常に意識しておくことが肝要である。

2. 政治的カリカチュアの歴史

2.1.カリカチュア(Karikatur)という語

ドイツ語の代表的な語源辞典によると、次のように説明されている（Kluge 1989: 357 参照）。ドイツ語の Karikatur という語は、イタリア語 caricatura に由来し、18 世紀に移入された。イタリア語の caricatura は、動詞 caricare（beladen（負荷をかける）、komisch darstellen（滑稽に描く））から派生したものであり、字義通りには Überladung（荷重をかける）を意味する。つまり Karikatur は、satirische Verzerrung（風刺を意図したデフォルメ）を意味する。そのような意図で描かれた絵は特定の要素を誇張して描くことによって諷刺の意図を表現している。

2.2. ヨーロッパ

カリカチュアは、ヨーロッパにおいては、古代ローマ帝国時代から続く長い伝統を有している。今日的な意味の政治的カリカチュアは、マスメディア（新聞、雑誌）の発達と共に誕生し、19 世紀に全ヨーロッパに広まった。英国では 1841 年に風刺雑誌 *Punch* が刊行された。政治的カリカチュアは、とりわけフランスにおいて、オノレ・ドーミエ

（Honoré Daumiers （1808-1879））の活躍によって、大きく展開する。英国とフランスの影響下で、ドイツにおいても1845年に雑誌 *Fliegende Blätter* が刊行された。現在では、政治的カリカチュアは、いずれの新聞にとっても、欠かせないものとなっている。政治的カリカチュアは、日々の出来事の重要な局面を批判的、しかも機知を持って描き、読者の注意を喚起するという機能を有しているといえよう。

2.3. 日本

周知のように、日本では12あるいは13世紀に、鳥羽僧正が描いたとされる鳥獣戯画が、政治的カリカチュアの始まりといえよう。今日的な意味では政治的カリカチュアは、明治時代に、英国の風刺雑誌 *Punch* を移植する形で始まった。当初、それはポンチ絵と呼ばれた。現在では、全国紙、地方紙の多くが定期的に政治的カリカチュアを掲載するようになっている[2]。

3. 考察の観点

3.1. 文化記号的観点

政治的カリカチュアは、さまざまな観点から考察することができる。例えば、文化記号的観点からは、次のような問があり得よう。左のカリカチュアに描かれている蜘蛛の巣は、何を意味しているのだろうか。描き手に特殊なものである可能性もあるが、筆者の観察によると、多くのドイツの政治的カリカチュアにおいては、長い時の経過を意味している。労働時間の短縮と労賃をめぐる議論が、いっこうに進まないという状況を描いているのだが、亀の甲羅に蜘蛛が巣を張るほどに遅々として進んでいない、それほど長い時が過ぎているというのが、このカリカチュア（Badische Zeitung、1988年4月21日）[3]が意味するところであろう。他方、日本の政治的カリカチュアにおいては、蜘蛛の巣は、長い時の経過はもちろんであるが、むしろ打ち捨てられ、荒廃した状況を意味している場合が多い。絵を読み解くコードが文化的伝統に依存して異なっていることが、しばしば観察される。

„Hilfe, ich bewege mich!" Bild: Haitzinger

3.2. 言語学的観点

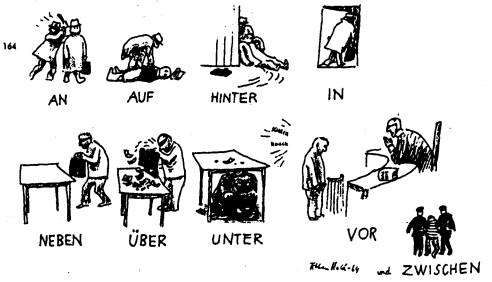
政治的カリカチュアを外国語授業における素材の観点から見るとき、それがどのような言語教授法上の可能性を提供し得るかについて、十分に考えなければならない。筆者の観察では、イディオム表現、ことわざ、人口に膾炙した表現等が政治的カリカチュアのモチーフとなっている場合が少なくない。そのような考えに基づいて、筆者は、他の箇所で、語彙学習の枠組みで、いくつかの提案を行った（植田 1993及び1997）。

4. ドイツ語教材の観点から

4.1. 文法

4.1.1. 前置詞

前置詞は、いわゆる品詞の一つであるが、ドイツ語におけるその数は限られている。つまり、閉じられた集合（geschlossene Klasse）である。これは英語についても同様である。

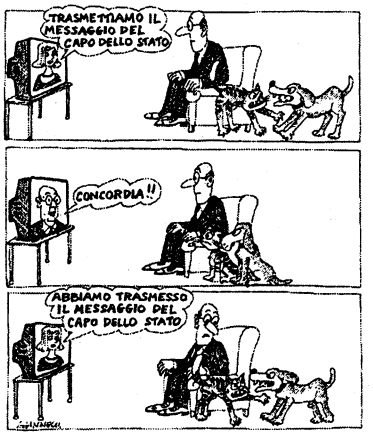


169 Niels-Christian Hold
An, auf, hinter . . . .

ドイツ語における前置詞は、英語とは異なって、前置詞と共に前置詞句を形成する要素に制限がある。一定の格を要求する。逆に言えば、伴なう後続要素の格に従って、前置詞を分類することができる。ドイツ文法では伝統的に、二格支配、三格支配、四格支配、三・四格支配の 4 つに分類されている。左のカリカチュアは、9 つの三・四格支配の前置詞に関するものである。絵に従って、これらの前置詞を用いて、一つの探偵物語（Kriminalgeschichte）を語るという練習問題が可能であろう。なお、三・四格支配の前置詞の使い分けは、状態・位置を示す場合は三格、変化・行為の方向を示す場合は、四格という意味的観点に従っている。

4.1.2. 現在形および現在完了形

次のカリカチュアは、イタリアの新聞（Corriere della Sera, 2010 年 1 月 2 日）から取ったものであるため、イタリア語の表現が出現しているが、文法的観点からは、現在形と現在完了形の学習素材として適切であると考えられる。ドイツ語の翻訳を与えて、ドイツ語の現在形と現在完了形の学習素材として利用することも可能である。「国家元首（大統領）の年頭のメッセージをお伝えします。」というアナンスを聞いた途端、それまで喧嘩していた犬と猫はテレビの前でかしこまって、拝聴する。しかし「国家元首（大統領）の年頭のメッセージをお伝えしました。」というアナンスを聞いた瞬間に、また喧嘩を始める。このカリカチュアは、 イタリア語では essere come cane e gatto、ドイツ語では wie Hund und Katze leben、日本語で言えば「犬猿の仲」というイディオム表現がモチーフとなって描かれている。



4.2. イディオム表現（Idiomatische Wendungen）

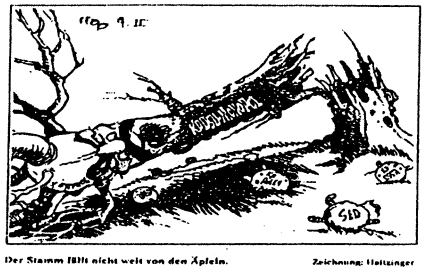
イディオム表現の多くは暗喩という比喩表現であり、具象的なイメージを喚起する。実際多くのカリカチュアがイディオム表現をモチーフとして描かれている。このことはすなわち、カリカチュアはイディオム表現学習素材として、きわめて有用であることを意味する。他方、カリカチュアの収集、選定については、教授者自身のイディオム能力（idiomatische Kompetenz）が決定要因となる。イディオム表現学習素材としてのカリカチ

ュアの有用性については、他の箇所で多くを述べたので、ここでは、一つだけを紹介する。

次のカリカチュア（Badische Zeitung, 2010 年 2 月 12 日）は、2010 年当初におけるギリシャの国家財政危機に関するものである。ギリシャの財政危機を端緒として、ヨーロッパ連合は揺れに揺れ、連合加盟諸国の連帯も揺らいでいる。ギリシャの国家財政が破綻するならば、連鎖的にスペイン、ポルトガルがそれに続く恐れがある。ドイツの主導でヨーロッパ連合全体でギリシャの国家財政を支えることになったが、どれだけ有効であろうか。そのような懐疑的批判がこのカリカチュアからは読み取れる。このカリカチュアは、少なくとも 3 つのイディオム表現をモチーフとして描かれている。すなわち Pleitegeier（破産を食い物とするハゲタカ）、Trojanisches Pferd（トロイの木馬）、Eulen nach Athen tragen（フクロウをアテネに運んでいく、屋上屋を架する、つまり、無駄なことをする）という表現である。2010 年 11 月現在においては、さらにアイルランドの財政危機が重なって、ユーロは対円で 110 円台を低迷している。

4.3. ことわざ（Sprichwörter）

ことわざもカリカチュアのモチーフとしてしばしば利用されている。右のカリカチュアが描かれたのはすでに 20 年以上も前であるが、ソビエト連邦崩壊という東西冷戦の終わりを告げる歴史的事件を描いたものである。モチーフとなっていることわざは Der Apfel fällt nicht weit vom Stamm（リンゴは幹から遠くには落ちない）、日本語で言えば「瓜の蔓になすびはならぬ」というものであるが、カリカチュアはこのことわざを逆転して Der Stamm fällt nicht weit von den Äpfeln（幹はリンゴから遠くには倒れない）としている。ゴルバチョフの開明政策をバネとして、次々と同盟諸国が民主化への道をとっていった結果、ついにはソビエト連邦自体も崩壊し、共産党一党支配の時代が終わったのであった（Badische Zeitung, 1990 年 2 月 3 日）。



Der Stamm fällt nicht weit von den Äpfeln. Zeichnung: Hoitzinger

右のカリカチュア（Badische Zeitung, 1989 年 9 月 23/24 日）は、すでに他の文脈で紹介したことがあるが、かつての東ドイツ、すなわちドイツ民主主義共和国（DDR）における徹底した情報統制を描いたものである。図から明らかなように、モチーフとなっているのは日本起源とされている「見ざる、聞かざる、言わざる」、いわゆる三猿（さんざる）である。これとの連関で DDR に関するウィットを挙げる。

Zeichnung: Gerhard Mester, aus: Deutsches Allgemeines Sonntagsblatt

Ein Zirkusdirektor wurde kurz nach den Feierlichkeiten zum 20. Jahrestag der DDR „eingeknastet“. Dabei hatte er es gut gemeint und an seinem Zirkuszelt ein Transparent mit der

Aufschrift anbringen lassen: „20 Jahre DDR - 20 Jahre Zirkus“ (Wagner 1994: 20)

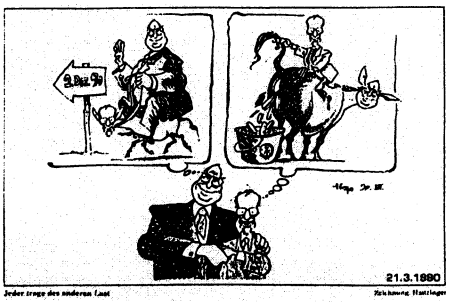
（DDR 建国 20 周年式典直後、あるサーカスの団長が刑務所入りとなった。団長の方では良いことだと思ってしたのだが、サーカスのテントに「DDR20 周年記念－サーカス 20 周年記念」という横断幕を掲げたことがいけなかったのである。）

4.4. 引用（Zitate）

有名な文句、歌曲、民謡等もまたカリカチュアのモチーフとして利用されている。次のカリカチュアは「なじかわ知らねど...」（近藤朔風訳）で馴染みのドイツ民謡「ローレライ」がモチーフとなっている。1970 年代ドイツにおける環境汚染は深刻の度を極めていた。ドイツの父なる川ラインは、国際河川であるが故に一層ヨーロッパのどぶ川と化した。流域に立地している重化学工業からの排水による汚染で、ライン川に生息する生物はいなくなった。その時代の危機感に発した環境保護運動の高まりと緑の党の躍進が、ドイツを世界のトップに位置する環境先進国としての地位を固めることになった。左のカリカチュアは 1972 年 10 月 31 日の Badische Zeitung から取ったものである。

„Ich weiß nicht, was soll es bedeuten ...“
Zeichnung: Hanitzsch

4.5. 文学作品（Literarische Werke）



Jeder trage des anderen Last
Zeichnung: Hanitzsch

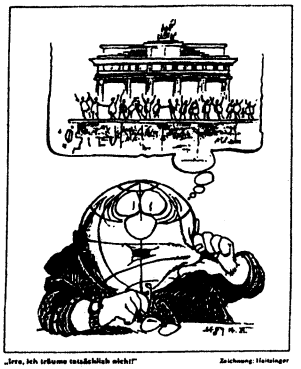
さまざまな文学作品の有名な場面、文句もまた、カリカチュアのモチーフとして利用されている。現在ではドイツ文学を代表するといっても良い『グリム童話』は、カリカチュアの描き手にとっては、モチーフの宝庫である。左のカリカチュア（Badische Zeitung、1990 年 3 月 21 日）は、『グリム童話』「ご飯の支度せよ、ロバよ金を出せ、棍棒よ出よ」（第 36 話）のなかの金を生むロバをモチーフとしている。ドイツ統一を実現しようとするコール首相、西ドイツからの支援を得て東ドイツを立て直そうと考えているデ・メジエール首相は、同床異夢ということである。

グリム童話は、日本でも馴染みである。とりわけ「赤ずきんちゃん」は、日本のカリカチュアの描き手にとっても、格好のモチーフを与えているようである。右のカリカチュア（「朝日新聞」1998 年 4 月 19 日）は、補正予算を虎視眈々とねらう各政党を描いている。赤ずきんちゃんは、オオカミ（各政党）の餌食となる補正予算ということである。

赤ずきんちゃんと腹黒狼
小島 め

4.6. ランデスクンデ（ドイツ事情学）

カリカチュアは、従来、ドイツ事情学を展開するための教材として用いられてきた。それはカリカチュアの性質からいっても、当然のことであろう。筆者自身もドイツ統一と



„Ach, ich träume tatsächlich nicht!" Zeichnung: Hanninger

の関連で、いくつかの提案を行った（植田　1998）。ドイツ統一から 20 年が過ぎた。1989 年 11 月 9 日、ベルリンを 28 年にわたって分断していた「壁」が崩壊した。世界中の誰もが予想しなかったことであった。東ベルリンの市民は、半信半疑で検問所を通過し西ベルリンへと繰り出した。そしてブランデンブルク門を取り巻く一帯では、人々が歓呼の叫びを上げ、驚喜した。この場面は、20 年後の今でも、多くの人々の記憶に鮮明な像として思い浮かぶであろう。夢ではないかと、頬をつねる世界氏である（Badische　Zeitung、1989 年 11 月 14 日）。1989 年 11 月 14 日、ライプツィヒにおける月曜デモから始まった東ドイツ民主化のうねりは、壁の崩壊をもたらし、1990 年 10 月 3 日のドイツ統一へと至ることになる。ドイツ統一は、20 世紀末における大きな歴史的事件であった。

ドイツ事情学の観点から見るならば、カリカチュアが関わっている事件が過去にさかのぼればさかのぼるほど、歴史的資料としての価値が高まる反面、教材として用いるには、周到な背景知識の収集が必要となる。その意味では、現在時点に近いほど、背景知識を収集することは容易だといえよう。同時進行の事件については、日々のマス・メディアによる報道で、かなり必要な情報を入手できるからである。もちろん、各種の報道が、当該事件の歴史的意味、真相について確実な認識を与えるものかどうかについては、疑う余地は十分にあるのだが。

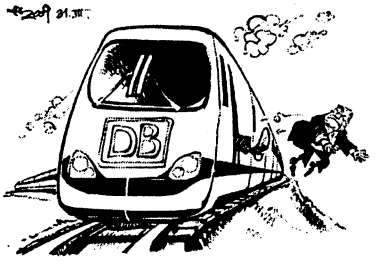
至近の出来事を描いたカリカチュアとして、いくつか挙げてコメントしてみたい。あくまでもドイツ語学習を支えるランデスクンデ（ドイツ事情学）を展開するための素材という観点から挙げるが、もちろん言語的要素も含むものを挙げることにする。

メキシコ湾における BP（イギリス石油（British　Petroleum））海底油田基地の爆発は、破局的に海洋を汚染し、多くの動物を死に至らしめた。それまでも北海における海底油田基地の火災事故等はあったのであるが、この事故ほど世界の人々の関心を集めることはなかった。それほどの大規模の汚染であった（Badische　Zeitung、2010 年 4 月 12 日）。この事故に関する報道で注視しなければならないのでは、原油による海洋汚染を Ölpest（油のペスト）と呼んでいたことである。実際は人災であるにもかかわらず、伝染病（ペスト）と自然災害視していることは、責任主体の所在を曖昧にしている。そのようなマスメディアの言葉遣いに我々は敏感であるべきであろう。

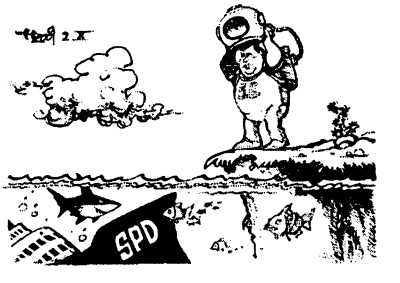
以下取り上げるカリカチュアは Der　Lotse　geht　von　Bord（水先案内人船を下りる）という表現のバリエーションに関するものである。この表現自体は、プロシャ首相ビスマルクが職を辞した際に、イギリスの風刺誌 *Punch*（1890 年 3 月 29 日）に 掲載されたものである。描き手は J・テニエル（John　Tenniel）である（Röhrich　1991/92: 976）。その後、この表現は、

さまざまなカリカチュアの描き手によってモチーフとして利用され、さまざまなバリエーションが生み出されてきている。

右のカリカチュア（Badische Zeitung、2009年1月20日）には、船でなく、海に不時着した旅客機が描かれている。旅客機に乗っているのはアメリカ国民を象徴するアンクル・サムである。そこに乗り込むのは、沈みゆくアメリカを救うという期待を担った就任したばかりのオバマ（Barack Obama）大統領である。水先案内人というのは、もちろん船舶航行に関わっているのが本来である。しかし、船舶航行に関する用語が航空輸送に関して転義されるのは、すでに一般的になっている。飛行場（Flughafen）がすでにそうである。Hafen といえば、そもそもは船舶用のものであった。しかし、飛行機が登場した時点で、その発着場を Flughafen と呼ぶようになったことによって、それと対立するものとして Seehafen ということになったのである。つまり、現在は Hafen（=Seehafen）の下位概念として、Flughafen と Seehafen があるということなる。他方、宇宙船（Raumschiff）と言いながら、その打ち上げ基地は Raumstation（宇宙ステーション）であり、鉄道用語を使用している。

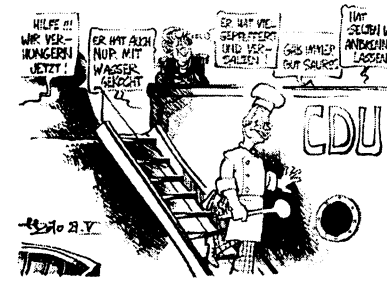


右のカリカチュア（Badische Zeitung、2009年3月31日）は、Und wieder geht ein Lotse von Bord（またも水先案内人が船を下りていく）となっているが、描かれているのはドイツ鉄道（Deutsche Bahn）の列車である。しかも、降りているのではなく、走行中の列車から足で突き落とされている。船が列車となり、降りるというのではなく、突き飛ばされる、という具合に、過酷さを増している。本来のドイツ語の言い回しは Der Lotse と定冠詞付きであるが、ここでは ein Lotse となっている。このことによって、水先案内人という意味が変わって、案内人、企業を率いる者、と一般的な意味となっている。



潜水服を着て、海に潜ろうとしているのは、ドイツ社会民主党党首 S・ガブリエル（Sigmar Gabriel）である（Badische Zeitung、2009年10月2日）。タイトルは Der Lotse geht an Bord（水先案内人、船に乗り込む）となっている。このタイトルがすでに元々の言い回しである「降りる」から「乗り込む」に変えられている。絵をよく見ると、乗り込む船は浮かんでいるのではなく、沈没している。「乗り込む」という表現は矛盾している。「沈没船に潜っていく」というのが正しい。果たして、沈没した SPD 号を再び浮上させ、航海可能な状態に持って行くことができるか、きわめて疑わしい。党首に負

わされた使命は、あまりにも重い。



右のカリカチュア（Badische Zeitung、2010 年 5 月 27 日）のタイトルは Der Koch geht von Bord（コッホ、船を下りる）となっている。コッホは、ヘッセン州知事でのことである。絵から分かるように、ドイツ語 Koch は料理人（コック）を意味する。その理由で、水先案内人ではなく、料理人が描かれているわけである。水先案内人はいうまでもないが、航海を続けるためには料理人もなくてはならない存在である。コッホ辞任後のヘッセン州はどこに向かっていくのだろうか。ドイツ連邦 A・メルケル（Angela Merkel）首相にとっては、重要なブレーンを失うことになった。

5. ドイツ語教材としての限界

関心と認識は、緊密に関連し合っており、相互に規定し合っている。両者は、系統発生的（進化論的）及び個体発生的に決定されていると考えられる。個々人における認識と関心の形成には、個々人のそれぞれの経験と体験が決定的に関与する。「刷り込み」（imprinting）という動物行動学の概念は、この点を捉えたものである。そのような「原経験あるいは原体験」が個々人の無意識の層に入り込んでいき、個々人の行動の在り方を決定していく。文化とは、そのようにして形成された無意識によって決定された世界の見方であると定義できるだろう。

政治的カリカチュアを十全に理解するには、多くの背景的知識が必要とされる。それ以上に、描かれたカリカチュアから何を見、どのようなメッセージを読み取るか。その理解の過程において、文化的な要因が大きく作用する。そのために、自らの文化とは異なるものを見逃し、本来とは異なった理解をすることも多い。そのことが文化間の摩擦を生じる場合も少なくない。政治的カリカチュアは、定義上、そのような政治的、文化的摩擦を生じるという点で、学習素材として一定の限界を有しているといえよう。

6. おわりに（Schlussbemerkungen）

とりわけインターネットという新しい通信手段が世界的に普及した現在、研究に必要な資料収集も座して可能となっている。政治的カリカチュアが描かれた背景となっている出来事に関する情報を、可能な限り手に入れることが必要である。それ以上に重要なのは、授業展開のために、資料を有効に利用することであろう。

描かれている政治的カリカチュアが何をモチーフとしているかを確定することは、それほど簡単とは言えない。複数のモチーフが関与している場合はなおさらである。さまざまな領域に関する知識が必要とされる。そのような種々の知識を手にしてはじめて、当の政治的カリカチュアが何を意図して描かれているのかを理解することが可能となる。このことはすなわち、政治的カリカチュアを十全に理解し得るようになることが、目標言語に関

する関する事情学の枠組みのなかで、外国語授業の重要な学習・教授目標となるということを意味する。同様に、他の箇所ですでに具体例を提示しながら詳述したが（植田2009)、ウィットを理解し得るようになることも、外国語授業における重要な目標であろう。

政治的カリカチュアが意図している重要なメッセージを見落とすことが希ではない。上述したように（3. 1 節を参照)、文化的な制限を受けて事物を認識するのであれば、それは避けがたい。そうであればこそ、異なった認識があり得るということを、相互に学び合うことが可能であり、有意義であろう。文化間コミュニケーションの意味は、相互に学ぶ合うことに意義があるのである。自らとは異なったものを、あるがままに受け容れつつも自らを失わないことが肝要であろう。

7. 注釈

1 本論文は、2010 年 7 月 30 日～ 8 月 6 日ポーランド・ワルシャワ大学で開催された「第 12 回国際ドイツ語・ドイツ文学研究者会議」（XII. Kongress des IVG, Warschau/Polen)、「第 15 分科会：外国語授業におけるカリカチュア、風刺画のもつ言語教授上の役割」（15. Sektion: Karikatur im Fremdsprachenunterricht, zur gegenwärtigen sprachdidaktischen Rolle des satirischen Bildes）における"Zum Einsatz von politischen Karikaturen （Bildwitzen） im Unterricht Deutsch als Fremdsprache – Möglichkeiten und Grenzen"（外国語としてのドイツ語授業における政治的カリカチュアー可能性と限界）と題する発表原稿を大幅に切り詰め、削除訂正、追加を行い、日本語で論述し直したものである。また 2010 年 9 月 25 日広島大学で開催された第 39 回西日本言語学会において、上記国際学会の報告として、筆者が行った発表の概要を紹介した。なお『カイロス』48 号（2010 年 11 月刊行）誌上の論文では、テクスト種ウィットとテクスト種としてのカリカチュアの関係に関する考察を詳細に展開している。

2 「マンガ」という語は、世界的に現代日本文化を代表するものとなっているが、元来は明治時代にイタリア語の caricatura に当てられた日本語である。

3 本論文におけるカリカチュア例のほとんどは、ドイツ連邦共和国フライブルク市で発行されている日刊紙 Badische Zeitung（バーデン新聞）からとったものである。描き手は H・ハイチンガー（Hort Haitzinger）である。

4 本論文は、外国語としてのドイツ語授業、すなわち日本語母語話者を対象とするドイツ語授業におけるカリカチュアの教材としての意義について考察している。従って、必然的に日独対照の観点からの考察が伴っている。ここで問題となっているドイツ語のことわざに関していえば、それに対応する日本語の諺は「瓜の蔓に茄子はならぬ」である。リンゴはヨーロッパでは誰にも馴染みのある日常的な果物である。そして瓜と茄子は、夏の代表的な野菜である。いずれのことわざにおいてもありふれた果物と野菜が登場している。瓜と茄子は、種類が異なるのであるから、当然に、瓜に茄子がなることはない。

8. 参考文献

Kluge (1989) : Kluge, Friedrich: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache.* Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Röhrich (1991/92) : Röhrich, Lutz: *Das große Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten.* Freiburg/Basel/Wien: Herder Verlag.

Ueda (1993) : Ueda, Yasunari: Kontrastive Phraseologie. Deutsch-Japanisch. In: *Zielsprache Deutsch,* H. 3, S. 128-133.

Ueda (1997) : Ueda, Yasunari: Politische Karikaturen, die deutsche Einheit und idiomatische Wendungen. In: *Zielsprache Deutsch*, H. 4, S. 202-211.

Ueda (1998) : Ueda, Yasunari: Die Deutsche Einheit und idiomatische Wendungen in politischen Karikaturen - Zur Behandlungsmöglichkeit von idiomatischen Wendungen im Deutschunterricht für Ausländer. In: H. Barkowski (Hrsg) : *Deutsch als Fremdsprache weltweit interkulturell?* Wien: Verband Wiener Volksbildung, S.141-160.

Ueda (2001) : Ueda, Yasunari: Idiomatische Wendungen in politischen Karikaturen und Witztexten. In: *Zielsprache Deutsch* 31, H.2/3, S. 30-47.

Ueda, (2004) : Ueda, Yasunari: Kontrastive Phraseologie - idiomatische Wendungen mit Tierbezeichnungen als Hauptkomponenten im Deutschen und Japanischen. In: RES HUMANAE PROVERBIORUM ET SENTENTIARUM Ad honorem Wolfgangi Mieder. Edidit Csaba Földes. Tübingen: Gunter Narr Verlag, S. 351-364.

Ueda (2007) : Ueda, Yasunari: Idiomatische Wendungen, politische Karikaturen, Interkulturalität - ein Beitrag zur Methodendiskussion in interkulturellen Forschungen. In: Csaba Földes/Gerd Antos (Hrsg.) : *Interkulturalität: Methodenprobleme der Forschung.* München: iudicium Verlag, S.239-255.

Ueda (2009) : Ueda, Yasunari: Textsorte Witz - interkulturell betrachtet. Vortrag auf der Tagung „Das Verhältnis von Theorie, Empirie und Methode in der Interkulturellen Linguistik", vom 19.-20. Februar 2010, veranstaltet vom Germanistischen Institut der Pannonischen Universität Veszprém (Ungarn) .

Wagner (1994) : Wagner, Reinhard: DDR-Witze. Berlin: Dietz.